

遊びのスクランブル交差点（4）

その後のおみせやさんごっこ

仲 明子

◇お客の少ないおみせやさんごっこ

「あいたよ。おばちゃんきて。」と、別の部屋にいる私は呼ばれる。

おみせやさんごっこが遊ばれ始め、遊びにやって来る子どもたちにとって、六畳での遊びは当然「おみせやさんごっこ」になっても、開店したおみせに買いに行くのは私の役目だった。

私はこうして呼ばれるたびに、どうしてみんなは「お客」になりたがらないのだろう、初めにお金を分けたのは何のためだったのだろうと、不思議に思うのだった。

一方、春になって、六畳の延長とも言える外の砂場での遊びには、「みずや」が登場した。

この一見、おみせやさんごっこの延長とも思える「みずや」は、いつもお客で賑わっていた。私は、この賑わいの中に、お客になってお金を払って水を「買う」ことを楽しもうとしている彼らの姿を見ることができてホッとしていた。

私がこの姿の現れるのを心待ちにしていたのは、それ

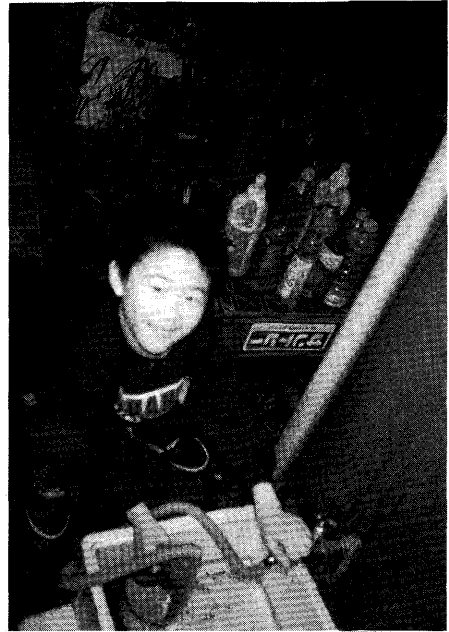
が、この遊びに抱いていた私のイメージであり、それが、スクランブル交差点に遊ぶなじみの薄い彼らに「互いにかかわって遊びたい気持ち」が育ってきた一つのしるしであると思っていたからである。

けれども、ホッとした一方で、どうして、お金とお客が突然にみずやにだけ姿を現したのだろうと、不思議に思ってもいた。

子どもたちは、六畳でのおみせやさんごっこを気に入っていて、おみせやさんになることを十分に楽しんでる様子なのに、どうして、みずやのように、お客になって「買うこと」を楽しもうとはしないのだろうか。

みずやおみせやさんごっこの延長とは言えないのだろうか。

それらを、みずやの遊びを手がかりに探ってみよう



思う。

◇ みずやに探る——遊びのイメージ

四月に入学したL・T・Yは、学校が終わるとやってくる、庭の砂場で遊ぶ。今日は、Tが同じ組になったKを連れて来た。

砂の減った砂場では、「どろ」が始まった。スコップで掘る者、水を汲む者、それを運ぶ者と、Nも加わって、早速い

三月の暖かい日に今年も「どろ」が始まった。Lのみずやは植え込みと自転車の間を通り抜け（右手の方から）、外壁とブロック塀の門の狭いすき間にある。

つもの遊びが展開する。

各々が工夫した方法で水路をつくり、各々の掘った穴に水が注ぎ込まれる。それが次第に各々の境を越えて増えていく。その様子が彼らにはおもしろい。さらに掘る。流れができる。さらに注ぐ。水しぶきが上がる。泥がはねる。喚声が飛び交う。そこには遊びの賑わいがある。

ところが、その日、先に来て水を汲んでいたLが、後から来たKに突然叫んだ。

「みずやだよ。大きいのは一本があじさいの葉っぱ五枚、小さいのは三枚だよ。」

あわてて葉っぱを採りに行くK。そして、N・Y。今まで賑わいの中心にあって泥の仕分けに一生懸命だったTまでが、砂場を離れて葉っぱもぎに行く。

「ヘーイ いらっしやい。いらっしやい。みずやだよ。」
と、Lは空のポリ容器にどんどん水を入れて並べる。砂場は買って来た水でたちまち海のようにいっぱいになる。

このように、毎日のように、水でいっぱいにするまで続く泥水遊びだが、今日は、「みずや」の誕生で、いつも押し付

け合っている水汲みと水運びが楽しい役となり、砂場の外の水道付近が、もう一つの遊びの賑わいの場となった。

その日以来、この遊び「どろ」には「みずや」がつきものとなった。

(1) いくらでもある安心

みずやの水は、いくら売っても無くなる心配はない。

Lは安心して次々と容器に水を入れる。いつも水汲みに使っているブリーチ、醬油、中性洗剤などの入っていた大小のポリ容器が、たちまち何本も並べられる。

そして、Lは声も高らかに呼び込みをする。その声に、つい誘い込まれて、砂場にいたNやYまでが葉っぱを採りに走る。

その安心は「買う」者にも同じようにある。

みずやのお金は木の葉である。採りにいけばいくらでもある。だから、いるだけ採って惜しげもなく使ってしまう。

そこで、お客になった彼らは、葉・水・泥の三つの間

を絶えず走り廻ることになる。その動きには、ためらいも不安も見られない。彼らの楽しそうな様子に誘われ、ついにTまでが水汲みに加わったのである。

(2) 買う必要があること

砂場で遊ばれている「どろ」には「みず」が必要である。その水を汲む（買う）ことが遊びの次の楽しみをもたらすことを、彼らは十分知っている。

工事で使い残された排水管やホース、といなどの切れっ端、やかんやしょうごなどを組み合わせて、自分なりの水路を作り、そこへ大胆に、慎重にその水を流し込むことが、昨日までは（水汲みより楽しい）遊びだった。

だから、このみずやにおいて、お客は水を流し込む役をも担っている。買うことは使うことである。



砂場は初めLの一人用。次々に広くして今では四人用に。それでも中に入るには狭すぎる。そこで、自然と外に並んで中の砂を外に出すのが遊びとなる。

る。砂場に水を流し込む楽しみは、買った水の量だけである。

彼らは、使いたい水を得るために（手段として）お客になって水を買うのである。

(3) 遊びの場に賑わいがあること

彼らは、砂場の遊びに「どろ」の一言で通じる共有するイメージを持っている。^{(*)3}

それは、砂場という遊びの場に泥水が満ちていくまでの過程を楽しむ遊びである。砂場には、喚声や指示、応答が飛び交い、彼らは必要な水や道具を求めて走り廻る。そして、そこには、遊びの賑わいが生まれる。「どろ」はその賑わいを楽しむ遊びでもある。

その賑わいは、遊びの場を中心にみんなで一つのことを楽しむ過程で生まれた。

そんな共有するイメージを持って遊ぶ彼らは、しのみずやをこのイメージの延長にあるものとして受け入れた。

新しく遊びの場となったみずやでは、彼らはお客になって一つのこと——木の葉のお金で水を買うこと——を楽しむ、さらに、そこに生まれた遊びの賑わいをも共に楽しんだ。

(4) 遊びのイメージ

お金を払って水を買うという点において、みずやは六畳の遊びの延長にあるかに見えた。

けれども、みずやは、遊びの場を中心にみんなで一つのことを楽しむとした遊びであり、彼らは、その過程に生まれた賑わいをも楽しもうとした。

一方、六畳の遊びは、そこに集まった一人一人が、並列する各々のおみせで、思い思いのおみせづくりを楽しむもうとした遊びであり、彼らは、その過程で互いに刺激され合い、認め合うことを楽しんできた。

このように、二つの遊びは、共有する遊びのイメージの異なる遊びであり、彼らがそこで楽しもうとしていることにも違いがあるように思われた。

そこで、みずやのように、お客になって買うことを楽しむという形で現わされなかった彼らの「かかわって遊びたい気持ち」の現れを、その後のおみせやさんごっこの遊びの中に探してみよう。

◇ かかわって遊びたい気持ちの現れを探す

(1) 無くならない工夫①——貸す

ぎんこう 誘われて六畳へ行く。

N おかあさん、はい、これ貸してあげる。と、Nは自分の全財産の入った財布ごと、私に手渡す。

私 お金 貸してくれるの？

N うん ぎんこうなんだ。使ったら返してね。

としょかん いつもの本を出して来たTは、今日は図書館に

なるという、貸りに来た私にお代は返すときでいいと言う。

私が「それじゃあ、返しに来る人がいなくなるよ。」と言っ

ても「いいよ。」とすまし顔。

初めの頃、誰もが大切に持っているだけで使われることの少なかつたお金。自分の持っているお金は減らさないで、れすとらんに来る人はお金が払えるように——そんなNの心使いが、れすとらんが休みのときだけ開く「ぎんこう」を誕生させた。

昨日まで、ほんやだったTのとしょかん（貸本屋？）も同様である。

売ることは減ることであり、やがては無くなる不安につながる。お金や本を占有したい、けれども、お客には来てもらいたい。そんなNやTの気持ち、「貸す」——また戻ってくる安心がある——おみせを登場させた。NやTのその工夫には、彼らのお客を自分のみせに呼びたい気持ちの現れを見ることができよう。

(2) 無くならない工夫②——共に過ごす

びょういん Nは昨日までくすりやに使われていた「おいしゃさんごっこ」のかんを持って来て、今日は病院になるという。

にがおえや Lは今日にはにがおえやになるという。早速、私は三十円で描いてもらった。次に描いてもらったNは、こんな顔はいやだと泣き出してしまった。

「おいしゃさんごっこ」のかんは誰にも人気がある。

聴診器、注射器、頭につける鏡など、自分が占有したくて選んだそれらは、「くすりや」で売ってしまうのはもったいないものばかりである。そこで、今日は、自分がその道具を使って患者を診ることにした。

一方、Lののがおえやは、紙と鉛筆しかいらぬおみせである。準備を楽しむのではない。モデルとなった相手を描くことを楽しむおみせである。

このように、お客という相手と共に過ごすことを楽しむおみせには、占有したい気持ちを上まわる共有したい気持ちの現れを見ることができよう。

(3) 遊びの場にする工夫——共に遊ぶ

げえむせんたあ Tは今日は「げえむせんたあ」になるという。おもちゃで並べた迷路やいろいろのすごろくのほかに自分ですごろくを作り始めた。

あそんでいいですコーナー

H いまからね、「あそんでいいですコーナー」って言うのをするの。

私 へー。おもしろい。あそんでいいですコーナー？

L おもしろそう。

私 一回遊ぶといくらってなってるの？

H うーん。ただであそべるの。

L へー。

H つまりサ、食べ物の試食とおんなじ。

私 あーなるほどね。

T ねえねえ お金なしで行けるの？ お金あげたらどうなるの？

H どうもならないよ。

四月に入学してLと別の組になったOがあまり姿を見せなくなったのと入れ代わりに、同じ組になったH(*4)が休日の六畳の常連になった。

おもちゃになることの多いT、Hは、「げえむせんたあ」にしたり、「あそんでいいですコーナー」を設け

たりと、各々らしい工夫をした。その結果、彼らのおみせには、遊ぶお客がやって来た。

売のおもちゃで遊んでみてもよいとまでいうH、自分のおみせに来て遊んでほしいT、おみせをみんなの遊びの場にしたいという彼らの気持ちの現れが伝わったのであろう。

ア以手す瑠ヨ 以前から父に将棋の手ほどきを受けていたLは、入学以来、父以外にも相手を求め、NやHにも教え始めていた。今年の冬のある日、とうとう、その名もずばり、「ア以手す瑠ヨ」というおみせを出した。どんな相手でもほしいLは、自分に勝った相手には賞金まで出すことにした。その日以来、Lのおみせは、いつも「ア以手す瑠ヨ」になった。

「ア以手す瑠ヨ」^(*)で相手するのは最初、本将棋、ハサミ将棋、オセロの三つだった。次に、スロットゲーム、チヨロQによる自動車レースが、さらに、カードによる

本将棋、ハサミ将棋、オセロをいにするよ。スロットゲーム、自動車レースもやります。
154-4445

図1 ア以手す瑠ヨの看板

下の数字は電話番号

誕生日占いまで加わった。(図1、次第に書き足して何日かかけてこんな看板になった。)それらはLの関心のあるものばかり。

Lはこの遊びの中で、自分に勝った者に賞金まで出して自分の遊びの相手を募ったのだった。(図2) その結果、このおみせでは誰かが代わる代わるLの相手をして

オセロ	100円 (かみたら1000円)
ハサミ将棋	10円 (かみたら2000円)
本将棋	50円 (かみたら5000円)
自動車レース	10円 (かみたら5000円)
スロットゲーム	7円 (かみたら10万円)

図2 ア以手す溜ヨの値段表

Lに勝つと()内の賞金が出る

いた。

このような「ア以手す溜ヨ」の出現は、自分のおみせを遊びの場にしたい、自分のやりたい遊びを共に遊びたいというLの熱い思いをまわりにいる者に十分伝えることができた。

このように、彼らの、自分のおみせを遊びの場にした——共に遊ぼう——という思いをこめた工夫は、結果として、他のメンバーに受け入れられた。

そして、お客となった彼らのおみせにやって来た。買うためではなく、彼らと共に遊ぶために。

*

このように、子どもたちの遊びの中に「かかわって遊びたい気持ち」の現れを探そうとしたことで、私は、彼らのおみせづくりの変遷をたどることになった。

そこでは、彼らは、自分が相手のお客になるのではなく、各々が魅力あるおみせづくりをすることで自分のお

みせにお客を呼び込みたいと、自分らしく工夫している姿を見ることができた。

そして、六畳でこの遊びが始まった頃、各々がイメージするおみせをつくることを楽しんでいた彼らが、次第にお客という相手とのかかわり——貸す・共に過ごす・共に遊ぶ——のある遊びの場としてのおみせをイメージするようになっていったことに気づかされた。

それは初めはスクランブル交差点に遊ぶ彼らであつても、毎日のようにこの遊びを続けたことで育つて来た、かかわりを持って遊びたい気持ちだが、各々の工夫となり、それを受け入れて「共に遊ぶ」お客となつて、遊びの場に姿を現したのだと思う。

私は、それは彼らが互いに「なじんでいく」過程でもあつたのだと思つた。

註

*1 六畳からは砂場の様子がよく見えるよう、戸の下の方が透明ガラスに替えてある。彼らはその戸を開けて、ぬれ縁か

ら砂場へ出る。

*2 売り買いを楽しむ遊びのイメージであるが、「売る」ことについては六月号でふれた。

*3 夏休みの砂場は、午前中は桜と白蓮のつくる木陰がとても涼しい。集まって来て「どろ やろうぜ」と始まる。午後
の砂場は西日が当たり、満面の泥水はすっかり乾いている。
昼寝後に集まって来て「チョコレートができている」とそれで遊ぶ第二部が始まる。こうして三年の間に「どろ」も随分に洗練された。

*4 隣の建物に住む。近所の川崎市立I保育園に通つたので入学前は遊んだことがない。現在、学童クラブに通つているので、休日共に遊んでいる。

*5 Lは、この頃、このような当て字を楽しんでいた。溜はLの名に、以は父の名に使われている漢字。

(舞々同人)